［自主研究］

# 生態園における昆虫類等多様性モニタリング調査

嶋田知英　小川和雄　三輪誠　長田泰宣

## 1　目的

埼玉県環境科学国際センター内にビオトープとして整備された生態園は、様々な昆虫や鳥類が侵入定着し、新たな生態系がかたち作られることが期待されている。

そこで、生態園管理のための基礎的資料を得るとともに、新たなビオトープ創造に必要な情報を収集するため、野生生物の発生経過を調査する。

## 2　方法

### 2．1　調査地点

調査は埼玉県環境科学国際センター生態園、及びそのモデルとなった騎西町内の玉敷神社で行った。

### 2．2　調査方法

鳥類及びチョウ、トンボ類の個体数を、ライントランセクト法により調査した。調査間隔は概ね2週間から1ヶ月とし、定期調査以外にも、適宜巡回し、出現した鳥類、チョウ、トンボ類の種類を記録した。

## 3　結果

2004年3月から2005年3月までに生態園で確認した鳥類、チョウ、トンボ類は、それぞれ46、36、17種となり、新たに、鳥類ではベニマシコ、コガラ、イワツバメ、クイナの4種が、チョウ類ではテングチョウの1種が、トンボ類ではオオアオイトトンボ、オニヤンマ、コオニヤンマ、アオヤンマの4種が確認された。また、開園後5年間に記録された鳥類、チョウ、トンボ類は、それぞれ、58、43、22種となった（表1）。なお、過去4年間に玉敷神社で確認した鳥類、チョウ、トンボ類の種数は、それぞれ26、16、5種となり、生態園における同時期の確認種数より少なかった。このことは、生態園が騎西町内に残された5ヶ所の自然環境をモデルとし、それらを組合わせたモザイク的環境として設計されたため、特定のモデル地区より、より多様な環境が存在し、そのことを反映して多様な生物の生息に至ったと考えられる。

## 4　今後の研究方向等

今後も、課題「自然環境データベースの構築による環境保全機能評価手法の検討」の中で、モニタリングを継続し、データの蓄積と解析を行う。
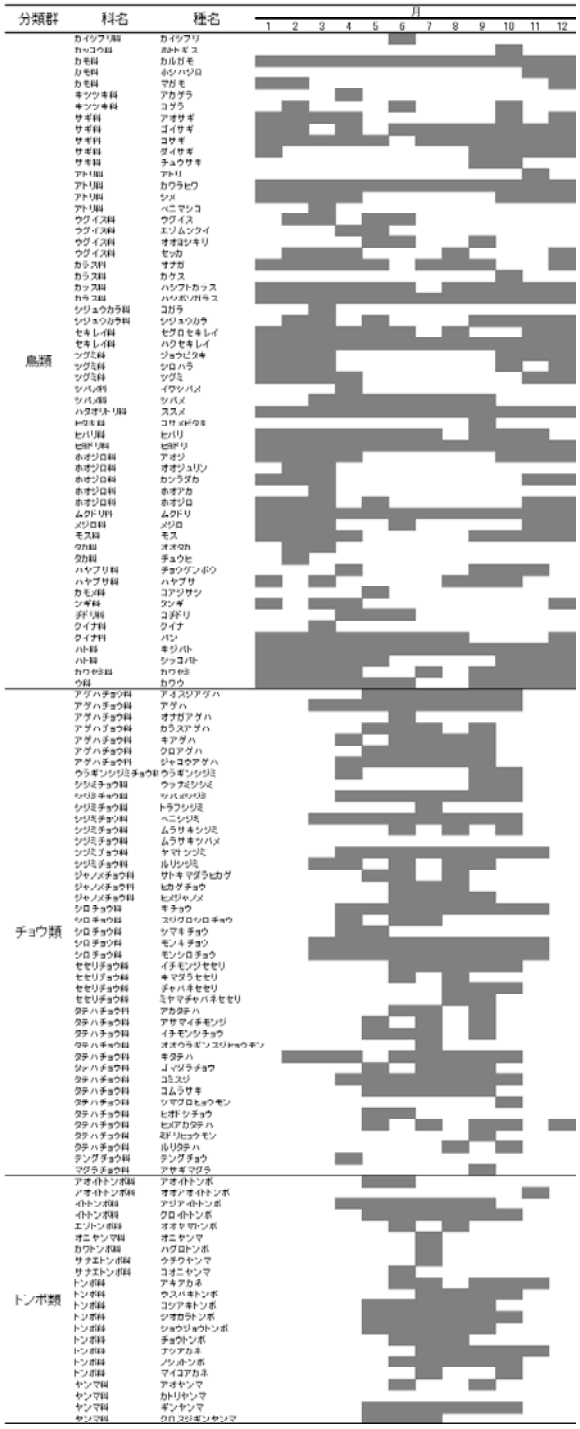
表1　埼玉県環境科学国際センターにおける昆虫及び鳥類の消長（2000年4月～2005年3月）